

敵前上陸より
 崑山附近まで

歩一三工本部

座談會記事抜萃

有馬少佐

上陸する迄は心配しました。上海戦の敵前上陸の例もあったものですから。然し案ずるより生むが易し。で上陸して見ますと、日本風に藁屋根や瓦葺の家もありそれに竹が多く、南面の丹地に接する様でした。四十七聯隊の方面などは泥濘の上に敵に散々射たれて、負傷者の處置に困ったそうです。

あの時つく／＼感心した事はあれだけの船
が霧がか、つてゐる時、よくあんなに整
然とやられたと云ふ事です

敵や土民が不意を喰つて狼狽した事だ
と思はれる事は、兵器を散乱して逃げて居る
し、民衆には洗濯物が干してあり、鶏が餌
を漁つて居た事でも知られます

嘉悦曹長

敵前上陸する時、船の船長が方向が判ら
ず、一里許り下流に流され、中隊を操すの
に、寒い目に逢ひました

有馬少佐

この上陸には上の方々が心配されて、色
々の品を持たされたもので、
先ず救命胴衣、竹、空罐、此水は浮袋代
用品ですが、それと梯子に水上発煙筒

乗馬や駄馬は持たせたいもので、
や重機は分解搬送です

上陸した時は天気でしたが、直ぐ雨になり
道はぬかりますし、兵隊には代えられん
と思ひ大方捨てさせました
丁度民船があり、したので、其れを徴発し
それに積んで送行して衆をしの部隊もあつ
た様です、此れは内地の軍隊でも、演習場に
泥濘を作り、行軍の演習をさせる必要が確
にあると思ひました

渡口少尉

私の感じました事は、渡河戦と上陸戦
斗に、弾薬盒の濡れるのは好いとしても
各人の携行して居る繃帯包を全部水に濡し
役に立たん様にする事です
此の頃は罐入の物も出来たようで、此は非
常に好い思ひ付きだと思ひます

其の他の装具も防水装置をして欲しいと思ふ品が沢山あります

有馬少佐

これは私の失敗談ですが、緒戦の永定河の渡河戦の時なんです

戦死する時、服装が乱れたり恥しいといふので、長靴をはいて参りました。それがお尻がはいて仕舞って、とうとう保定迄地下足袋を履き、巻脚絆の代りに、繃帯をして行きました

其の時も岡本保隊長殿は、軍袴の中の品物は皆上に入られました。私は其のまま、たつたものですから、チリ紙、時計等、まつかりおじやんにして仕舞ふ大笑した事があります

上田軍曹

杭州湾上陸した時、粟の砂糖漬が各民家にありましたが、随分食べたものです

有馬少佐

あの辺の土民の食食物もよかったです。支那軍の給養も好い様でした

トラツクにも慰問トラツクなんか云小のがあつた。靴下、襪子、タオル、日用品なんか、うんとあつたので、皆喜んで交換したものです

「蒋介石給養」と云ふ言葉は、其の時分から流行しました

自分もワイシャツを交換し、好きはブランデーに有りついたので、此はもう赤面の種で、其の頃は聯隊副官として居ました。が、作戦に夢中で酒とも縁がなかつた。年に入つた羨望なものです。早速賞味し、みるる中に酔を登し、温順しい

聯隊長殿から歐られました。今考へると全く赤面します。

話は別で蘇州河から山家村に行く時は師團通信の後方を行つてみました。

一路南京へ行く道なんてなく、田や畑を

つ、切つて行く有様でした。完全に一晝

夜歩き通したのですが、飯を食てみないものですからペコ／＼です。

至る所クリークはありますが、水がありません。

そう云ふ小具合で唯氣力で頑張つて居ますと

瀧杭甬鐵道を軍用列車で、上海方面から逃

て来る奴を止めました。アツと云つて居る間

に後退して大分逃しました。それども道を

を来る奴を黙つて、プスリ／＼とやりま

した。一人で百二十三人は殺して居ます。

夜明けに成つて敵が物凄くやつて来て不幸

森少尉を戦死させました。

之をんかは、夜を日についで努力した賜と思ひます。

又、青浦に行く途中十一月九日の晩に

と思ひますが、四十七聯隊が前衛で其の後

を、旅團司令部や師團司令部が續行、その

後十三聯隊は追及して進んで居るので

が、前方でバリ／＼射撃して居ります。

前進して見ますと、フランス人經營の立派

な天文台があります。

其處を通ると戦斗の渦中に入るからと横

を通りました。

射撃して居る所に行つて聞いて見ますと

先には部隊は居ないと申します。

そんな筈はないと、聯隊長殿が無電で連絡

を取つて見よ、と云はれますので、その手

配をしますと、無電機が毀れておりました。

困つた事だと種々方法を盡して居ますと

幸な事に熊本のラジオ屋の若主人といふ兵

が六中隊に居て早速修理して呉れましたので連絡を取って見ますと師團司令部が苦戦して居るから十三聯隊は直に應援に來いとの事です

道を其の方向に取りますと聯隊長殿がおかしいから好く連絡を取って行けと注意されました

この不眠不休な行軍然も暗夜に混然となつた中で猶細心な注意を拂おうとされ

聯隊長殿の御心に敬服しました

連絡を取って見ましたら斯うなんです最初前衛が通る時は何の事はなかつたので

すが丁度師團司令部が前進する時敵の退却部隊と衝突し其の護衛にのみ十三聯隊の一個中隊と四十七聯隊の二個中隊

其が入り乱れて乱戦最中なんです漸く未明に追及闇に合つた訳ですが其の時の師團長閣下は服は泥まみれおま

けに眼鏡のツルが折れて糸で修理しておかけになつて居られましたがおいたお

いと思ひました

閣下が隊長殿に
「おい、來てくれか」と
云はれた顔は嬉しそうに見られ私達も微笑んで居ました

嘉悦曹長

天文台と云いますと聯隊では最初二大隊が先ず行きそれから一大隊と聯隊本部が参りました

朝方になると冷えて来て寒くて困ります
大川で火を焚いて湯を沸かして居ます
渡辺軍曹が

「おい、此処に二イが居るぞ」と
云つて立上りました
其れを見ると支那兵が四名支那軍と思つ

夫のか穢又を炸つて居るのです
一も二もありません 河上の方で早速切り
ましたが ひと河下を見ると 山砲の矢が
米を流つてみます 米さが二イを殺して流
したと云ふ話にも行かず 顔を見ろのが氣
の毒でした

其の天文台を攻撃した朝軍のかは 前進し
て行きますと 支那兵が友軍と思つてつい
て来るのです

夫んく 明るくなつて 日本軍と判り憶て
、逃げに行く それをつかまへて殺したの
ですが 一人可愛い、顔の美少年が居て
熊谷次郎と云ふ訳じやないのですが 助け
てやりました

其の時思つた事ですが 人間も人相が好い
と 戦地に來て感得をするに感心しました

有馬必復

支那兵で感心した話なんですが 上陸し
て直ぐ捕虜にした支那兵を聯隊長殿が馭兵
にして使つて居られましたか それが仲氣
が利いて居る

先ず馬に乗られる時は 乗り好い様な高い
処に馬を引ばつて行く 降りられる時は直
ぐ腰楸を準備する 身の廻りの事は何んで
もする 恐らく兵隊にぶんな氣の利いた兵
は少ないと思ひました

其の兵が小笠原でぬなれと思つたら死んで
ぬました 可哀想な事でした
余山嶺が占れて 青淵で休養した時ですが
兵隊が暖い所を見つけましたからと云つて
來ました 行つて見ますと暖い事は暖いが
臭い 不思議な事と思つて見ますと
支那兵の死骸が一杯です
氣持の悪いものでした

青浦から先は先遣隊で 上海—崑山路の
 道も偵察しつゝ、前進して居ますと
 地附近の橋が毀れて居ると云ふので 下流
 の方に行き蘇州河の処に行つて見ますと
 大きな汽船が来ます 其処には高級將校な
 んが一杯乗つて居て 兩岸には兵隊が
 ついてまきよります
 好い鴨と 此の處置を一大隊に命じ 射隊
 は上海—崑山路に行つて見ました
 すると向小から ヘツドライトも 煌々と
 照してツイくゝ来つて来ます
 悪い事には本道の脇にクリークが有つて
 渡河しないと行けません それで聯隊で
 持つてゐる重火器も全部道の線に並べ
 二千米位ありましたでせう
 一個中隊で道路の口を押へさせ
 一二三の号令で バリ／＼がんと 一番に
 射ちました

白鷺

敵の狼狽ぶりを見て居て痛快で 思はず快
 哉を叫んだ事でした
 敵にも気概のある奴は應戦しますが 凡そ
 団体の力に刃向小個人の力なんて知れたも
 のです 其れを三回繰り返しました
 処が好い氣になつてやつてゐる中 夜明に
 なつて見ますと すっかりこちらが包圍さ
 れかゝつて居ました 危い所です
 師團は橋の所を通つて二日間苦勞したさう
 です
 我々も苦戦はしましたが 戦果は大きいし
 あんは痛快な戦斗は そうさうに有りませ
 ん あれで感懐も頂ける処ですか
 合せて一本で 師團が貰つて任舞ひま
 した

嘉悦曹長
 その頃の糧秣の補充は大概 敵の遺棄し

た奴で、蔭介石給養に預らん兵は一人も居
ないでせう。倉山の鉄道線路の処に鉄橋が
ありました。其の雨側で、雨方から交互
に銃兜を投げたり、石や、手榴弾を投げり
て、戦斗した事もありました。

有馬少佐

一寸した親切が大さく報いられて、然
し夫詔がありすぎが、丁度海軍の航空兵が
敵と味方の空間に不時着して沸れ鼠となり
体一つ、二中队の歩哨線に引かゝって、聯
隊本部に殺はれ、茶ました。
何人にもなく、荷合せの外套を着せて、食
事をさせ、翌朝送り送りました。
唯それだけの事ですが、甚過ぎ隊長が自動
車で茶られ、御丁寧な、御礼の言葉も頂い
た上、日付の新しい内地の新聞と、ルビ
クオンと云ふ、煙草を頂きました。痛み

入りました。

高島晋長

人の命の強いと思ひましたのは、倉山の
戦斗で、原岩上等兵が頭部貫通銃創で、腦
味噌の出る様な重傷を負って居ました。
前途中なら火葬にするんですが、息をして
ゐるし、折よく衛生隊が来ましたので、收
容させました。処、今じゃビンクして、補
充隊で初年兵の教育に任じて居るそうです。

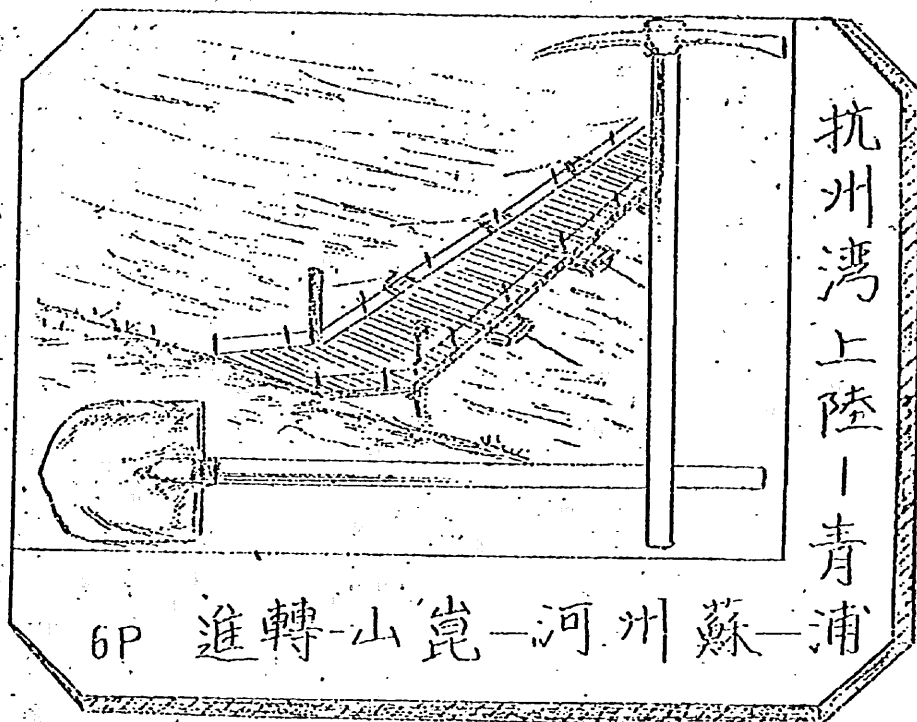
川柳

歩三 丑ノ三

前田義人

彈丸を射て

母の為慮に手を合せ



抗州灣上陸—青浦

6P 進轉山崑—河州蘇—浦

上陸から崑山附近まで

工兵第六聯隊本部座談會より

津崎少佐（本部）

抗州湾上陸は十一月五日午前六時頃と記憶してゐますが

上陸の際の敵舟は聯隊本部と吾々第一中隊は別の舟で、聯隊本部が先に上陸し、第二中隊は四十七聯隊の主力と上陸しました。吾々の方は簡單に行きました。聯隊本部が上陸したヶ所は大変な處で、丁度満潮ではあり、敵舟からと降りて前進すると後から潮が来る。前から弾丸が来る。非常な潮流で鹽分濃さ水たさうです。騎隊長殿存人か、は廻つて前進するといふ

状態では殊に聯隊本部の一部と一中隊の一

個分隊をのせた鉄舟は、方向を間違へて西

十八師の上陸ヶ所に行き、直正面から敵に

ぶつ、かつて、聯隊最初の犠牲者をだした

文は後で聞き、又見にも行つたのですが、潮

霧のため方向がわからず、敵の掩蓋陸地の

直正面に上陸したもので、すかり、重機を掃

射にあひ、折からう満潮で段々と潮が満ち

て来る中で、みる／＼うちに員傷者を出し

たさうです

後からは、「早く行け」と奴鳴る、前の者は

先の方に行くとなんほ命があつても足ら

ない、と奴鳴り返す、皮肉なもの、五回程横

の者は何の事はなりのに、たった四分か五

分の間の出来事でした

二小等は間違ひだけでは片づけられ、口

惜しさを今でも思ひます

島山軍曹（一中隊）

上陸當所の心算がたつたもので、私

達は第五師團の四十一大隊の既席に居るこ

とになり、四日の晩に小隊長殿が二個分隊

宛二組の縮成とされ、嚴肅な表情に悲壯な

決心をこめられ、天下に冠たる六師團の兵

隊としてその聲援に駆り出され、一つには

五師團の買托にも應へたり、此は、いけな

と言はれた時は、私達の心の中に燃え、もの

がこみ上げて参りました

訓練が着んで一同装具を手に、小隊長殿を

中心にして円座を作り、小隊長殿が持つて

ありれた、ウチスキーを一本廻し、飲にしまし

た

黄昏のせまうた、友那海、潮風がデツキの上

で、肌寒く感ぜられる、舷側に砕ける波の

音、前を見て、後を見ても、よく立ちこ

るに、と思はれ、水ありの艦圍——壯士一度

去つて亦還らず、今思出しても感慨が
深くあります

寒くなったので船室の中に這入り、加給品
の酒を加へて飲み始めました。か
一す座を
脱しては身の仕末をする者、襦袢や袴をか
へる者、手紙を書くもの、私も手紙を二通
だけ書いて内座に加り、恩存分はしやが廻
りました。

背囊枕にこけしまどろんだ頃、起床と起さ
ずして時計を見ると、午前三時でした。それ
から大発に乗り本船の舷側に二時間程居ま
した。顔を見るでる霧の感觸に、拂曉の寒さ
に震へながら、銃をかこみ肩をくつ、
け合つて寝たものです。

突然我鳴りたつた大発の音に、ハツと眼を
さまし、愈々敵前上陸だと思つた時は、武
者震ひに似たものを感じました。

察するより生むが易いで、上陸正面には敵
は居ず、左の方向に楯人に吠える銃砲聲に
緊張せせられつゝ、歩兵の後から爆撃を擔
ひ、全山衛城に迫りつきました。補房の言に
依りますと、前の晩にこゝで宴會があつたさ
うです。

津崎少佐（R本部）

私の中隊の一小隊の兵隊が黄浦江で汽船
を微発した話です。

それへ單身乗込がまずと、敵の銃聲が山
積んである。そして支那兵も居たさうです
が、ふよつこり入つて来た日本兵に膽を潰
して、その日の早業を河の中にほうり込んで
河の中に逃げ込んださうです。それで牛蒡
剣を引つて抜いて二階に昇つて見ますと、
そこにもやはり敵が居り、剣を振り下さう

とす。両手で握られ、とうにも仕様がな
くなり、「早く来なさい」と急を告げ、必死
助りました。危いところでした。うっかり
なめてか、うしろにた失敗があります
その船を獲つて後で大獲ためにになりました
其の船を利用して黄浦江を溯って行しま
すと、確か十一月の九日でした。大型の汽
船が下へて来るのに逢ひ、早速停船して
調べて見ると、何れも人員の半ばかりです
知識階級らしい奴ばかり来ておます。そ
れを警官が三名護衛して居ました
中に一人日本語を流暢に話す奴が居ました
聞けば其奴は事変前迄大阪でコックをし
て居たさうで、たしか二十三聯隊がスフ通
訳として使ったさうです

荒金兵等兵（一中隊）

上陸したから青浦まで持って来た折疊舟

第二中隊は中隊より十三聯隊に配属され
道路より右に行きました。時々飛行機から
通信筒を投げてくれました。小隊長の青
木中尉殿が敵情を話して下さるので、それ
がこぼれ探知又嬉しいものでした
その夜の行軍の時ですが、近くにサークル
イトや懐中電燈の灯りが見えます。激突す
べく隊形を整へ最初に重機が射ちますと
ひとしきり何チヤかんゲヤと、訳のわから
ん大聲で奴鳴ってました。すぐ青黄の
照明弾もありると共に、笛を吹いたり、喇
みを吹いたりして突進して参りましたのが
夜目にも判然り面白い程、バタ／＼襲来ま
した。せめて逃げる。こちらを追いかける
十三聯隊の六中隊等は尻にくっ／＼と探にし
て崑山の方向に急進。きつても何も忘れ
の進退でした
八行程行くと小さい橋がありました。そ

二線陣地から猛射を受け、後の部隊が通れ
ません。先に行った部隊から傳令が粟鼠の
林にとび込んで来て、トウチカがあるとい
ふ報告でした。そこで工兵隊よりトウチカ
破壊の決死隊が出る事になり、自介以下四
名の者が橋を渡ると危いので、禰一ツに銃
剣を止め、鹽に爆薬をのせて行きました。が
対岸にたどりついて見ると、敵は今しが
た退却したとみえ、猫の子一匹も居ず、あは
れ、逃げたのでせう。取乱した壕内でむし
ろ拍子抜けした思をした事があります。

林軍曹 (二中隊)

上陸以来長蛇の如きクローチを折疊舟で
前進。クローチのない所は臂力で運びまし
た。蕨川河の手前の小さな河を三才六旅團
を渡しました。この水は河中が狭いから、誤

はありません。愈々第一線が第一線に逃が
つきました。先具の林を折疊舟がやい
く、歩兵隊は渡せず、といて民舟はなし
橋はなし、歩兵の戦いは意の如くならず、
歩兵からけ、諸軍の傳令が参ります。
早石小隊長殿は
工兵魂を發揮して全力を盡して運搬せ

と言はれ、一晩中河を往復しては渡河は任
じました。やれでも運搬はされません。朝
矢野小隊と交代しました。時は誰の手にも血
豆がニツ三ツ出来て居ました。
矢野小隊が炊いてくれた飯は舌鼓をうって
御馳走になりながら、その飯がすた喰ひ終
らないうちに小隊長殿が
「文より舟を蘇州迄臂力運搬」
と言はれた時は、ヤレ、と思はず、溜息が
出、トタンに飯が不味くなり、せめて飯が

すま途だ、く小い、いのに、小隊長
殿を恨みました

命令とあらば水火の中にもと不慮の同志一
つで鉄舟を遠ぶかけますと、高昌の右岸に
トラツクが三台あり、あります。吾等、
神風、と小隊に元自動車遠轉手をして、
芦谷一隊兵が修理して、く小の道、二三時
の間、昨夜のきつかつた道や、中支の印象
も、果ては南京を陥せば凱旋、なかと途方
も、行い、幸を興、太つておました

ガソリンは豊富にあるし、天好の甲と
さて、運轉の役に、なるとハタと回りました
は、一台は芦谷が居るからよいとして、後の
二台の運轉です。工兵學校で二日間習った
軍のある、浦上上等兵にやらしてみましたが
警備の鳴らし方を、知つてゐる位、平石小
隊長殿がやうなると、之は見事に動きました
たが、百米も走らないうちに、器材をばまりこ

ま、し、く、ま、い、と、人、の、下、で、す、
の、私、屋、の、見、て、下、さ、い、

と元田タク、助手をして、たといふ、
原一隊兵が地獄で佛の役を買つて、おました
一台は棄て、二台で行きました、
河の上流の、と、三、三、三、三、三、三、三、三、
た

津崎少佐 (R本部)

師團が崑崙山附近であつた話ですが、夜諸
所に歩哨を立て、露營してゐた時、話です
兵隊のイビキの音にかこまれて、参謀連中
が地圖を囲んで作戦を練つて、いられた時、
す、一人の兵隊が、と、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、

紙片を渡さうとする、ひよと見ると、何と、
那兵隊のです、この野郎、と、一も二も、
りません、捕へたさうですが、あの辺は、大師
の進出が意外に早い、ため、敵も味方も、いりま

じつておました

——崑山のユーモア—— 今でも笑の種です

植松中尉 (一中隊)

その崑山で参謀長殿に一杯食けられた話です

他の師團は南京二千米に迫ったといふ急電が入った。日本一の六師團を以て任ずる

吾々が他の師團に負けた人で中隊がない急行軍だぞ、と言けれる。そこで驢馬牛

を捨て土民を徴発しやうとします。それがそう。あ、それと見當りません

肩にくひこむ背囊の重さも行人のその

歩き方から小便

歩き方から食事

あつたから睡眠と殆んど休憩らしい休憩も致しません

騎隊長も

敵の若都は攻め討つたといふ。武人の名譽を擔はんと競ふ者が、落伍する者は落伍せよ

せよ

と叱咤激勵される。部下將兵も何のこゝろもさと互にはげまし合つて進んださうであり

と何月行つても敵は居ても友軍は見えず

人。十二月の碧空には白い雲がみだれと入る。ある初冬の一、夢に見た紫金山がホッ

と浮か上り城壁がだん／＼と近くなつて来ても他の師團はまた来ません。参謀長殿に始

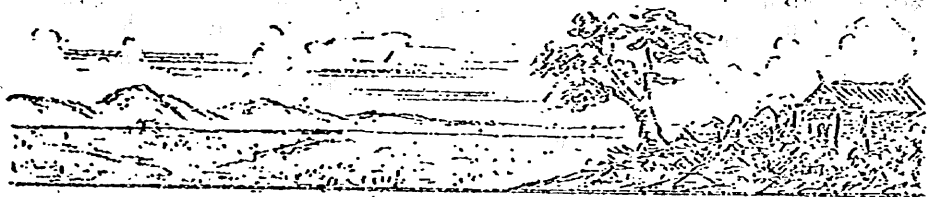
りてかつかれた事がわかりました。戦友の骨を飯盞に入れ首にさげた兵はそれまで

さ。又は御互に相擁して感激の涙をこぼしたとの事です

前田准尉 (一中隊)

その二三日前の事です

急行軍して蜿蜒長蛇の列を作つてゐる吾々の
 の頭上に敵の飛行機が飛来し、部隊の後から
 射撃して行きました。中隊は玉城小隊が射撃
 隊となり、早く射撃区所につき射撃したのはよかつた
 のですが、地形の低いところで射撃してゐる兵に
 「そん片低いところなんで、高い所で射撃して
 と此りとはしてゐるやうに聞いて、小學校の讀本に
 笑話として、屋に上つて星を落せと言つたおれを思ひ
 出して、連日の疲労を笑ひで吹き飛ばしました。



煙水たる友に

射水も告げやうすいと眠みぬ

敵のトーチカ

霜はあり

風はたえに刺す暖に

喜ばて立つ人柱かな

彈あらし何かおそ水ん

小崩し谷をうずめて

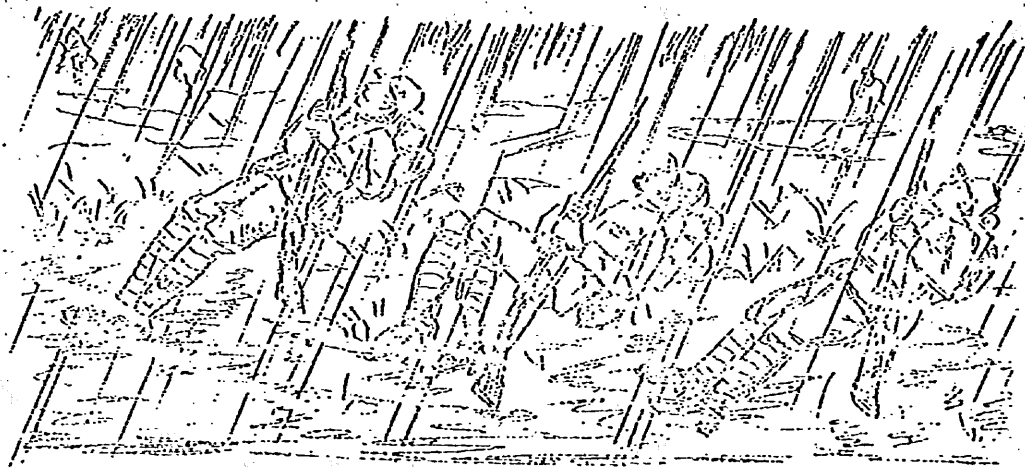
土と戦ふ

彈丸の跡かすかに浮ぶ

日明り

さびしく従軍中南京城

六ノ二 高橋吉部上等兵



降雨と泥濘

歩四七ノ一 歩兵軍曹 加藤 三郎

早朝起床 完全に上陸準備も出来ました 朝霧が立ちこめく
一寸先も見えない 船は昨夜赤松州湾に碇泊してわろいです
午前九時 数隻のランチに分乗し 陸を指して猛進しました
約十五分猛烈な勢で走りまゝたか 濁流は引き潮の故か 河の
ヤン海流水です

銃声かします 陸も沢々迫くはります
ピュン << 素つておるランチを狙つてたゞのやせう

カチン 榴にも命中します

と 浅瀬でもあつたのか舟が止りました
上陸

分隊長殿の号令一下 浅いと思つて飛び込んだところ 意外に
深くて 胸迄没りました

敵の射撃は益々 猛烈になり 私の前後にも容赦なく飛んで来

まず、濡し水中のことだし、足も自由に動か
ず、やつと陸に着きました。

胸から下は、ぶぶ濡れです。第一線陣地並
は千米突。敵弾が数と斧頭をかすめま
した。泥の中ですが、仕方なく伏せました。

沖合からは、子猫より盛んに砲撃を加へ
ておます。

飛行機も螺旋を回しておます。海陸空三方よ
りの攻撃です。

敵は余り大した抵抗もなくして退却しま
した。

敵の第一線陣地で昼食を済まし、服も鏡
も泥まみれ附近のクレークの泥水を洗ひ

直ちに追撃前進に参ります。道はま田の畦
道を、そしてクレークを渡つて……

夕方より雨がボツ／＼降り始めました。
その水が道が乾かすので滑ります。嵌ります

其上雨は増し韓が苛酷出でず。嵌ります
日は既に地平線の彼方に没して、附近を

見ても感らぬときも思当りません。相変
らざる道です。先を歩いてゐる戦友の姿も
見えなくなりました。

黒い所が道で白く透して見えるのか、ク
レークか又は水田です。真暗で鼻をつまみ

水ても分りません。火は一切に禁物です。
煙草を喫ふのも掌の中です。

時々のひどく韓びます。
徳はもう六回目だ。

どか後尾の方で言つてゐる者があります。
人が韓ぶつを見ても笑ひますが、この時は

かりは替必死でした。
雨は次第に激しくなり、土砂降りです。

身付中完全にびしょ濡れぐした。
中隊は尖兵です。大隊本部より

1 部隊があつたら宿營するから、家を捜せ
と言つて來ました。然し附近には家らしい

ものも見當りません。
又大隊本部より

「家は無いか」

と嘯鳴つて來ます

「よしッ 家が無ければ夜行軍だ」

と大隊長殿の命令です

「二千米位行つたかと思ふとき

休憩

と言ふので植田古兵より煙草を貰ひ

身を銃兜の中で擦つたが濡れてゐるので火

がつかない 煙草すら喫めない

附近を見ると皆戦友は泥の中に聲を掲へ

て、向ふ向きになつて高聲で眠り出しまし

た 自分も其の横の泥の中に寝ました 寒

さも雨も忘れて晝の疲れに何時しか眠つて

しまひました

「出發準備

の聲に夢破られ 又泥濘を前進します

一時間一歩も前進出来ずでせうか 道

がクリークに沿つて進むので フラ〜と

眠りながら行くと蒸込みさうです

「夜はほろほろ疲れが出て眠れぬが、雨は

ラッとしたかと思ふと、クリークに足をと

突込んでおます 直ちに銃を左手に持ち変

へると 誰かい

「どうしたんだ、しつかりせんか」

と云つて私の銃を引張つてくれ、漸く

助りました

三軒も行つたかと思ふ所に一軒の民家が

あつたので、大隊本部はこの家を中心とし

て、各中隊に指定地を配當してくれました

然し泥田の中です 附近から藁を集めて

泥田の中に敷き、そして被つてシボ濡れに

なつた服を着た儘 寒さを忍んで一夜を明

かしました

以上は上陸より第一日目に 降雨と泥濘

と睡魔に悩まされた當時の想出です

作戦全員

グリークに流された

坂四七ノハ 歩兵第百一隊 武夫

五日の明け方湖水の如く浪穂が海面を衝いて、敵前上陸を敢行しました

陸海の緊密且つ巧妙な作戦は、見事に功を奏し沿岸一帯に障地を固めてゐた敵も、虚をつかれて狼狽、抵抗の気力も失じたのが、軍艦より僅か十数発の砲声か、暗闇を破つたのみで、我軍の損害殆どなく、未曾有の敵前上陸は空前的成功を収めたのであります

我々部隊の上陸は午後三時頃でした。運送船から鉄舟に移り、鉄舟から筏まで浸る海の中に飛び込んで陸に上りましたか、勿論敵の影もありません

先づ感したのが井波とは違つて、糸原は瓦礫で、一帯内地を促はせるところがあり、

朝の戦いに嫌子になつたのでせう、水牛があちこち轉つてゐます

全部の上陸を待つて、愈々追索戦に入りました

夕方になるとシホく雨が降り出し、道は田圃の畦道で、段々暗くなるので来ると滑り出しました。前と後ろで戦友の誰れ彼れが滑つたと笑つて居ます

自分は仲々調子よく、皆が暫ぶのが可笑しい程で、そこに一寸法螺を吹きました。するとその法螺が祟つたのか、とんどは轉んだ

後ろの頭も割れたかと思ふ程でした。後ろで笑ひの大声が起つた。幸ひ夜間の事で赤い顔は見られずにすんだが、それからは暫くないのか不思議な程でした。二うして三日三晩行軍が續いたのですが

其三日目の晩でした一寸した石橋があつたそれを進んで行くと後ろの方であつた

「あつた」といふ声かしたそれに續いて

「グブーン」と水音がする誰か橋上から水中に落ち込んだのだ

誰か

と訊いてみると兒玉上等兵でした可笑しくても笑ふことは出来ず本人はバタバタ這上つて來ました

この行軍で轉ばなかつた者は殆ど稀です

このいふ状態で追慕の歩を進め十一月九日朝には松江を陥れました

それから中隊が突兵となり隙防橋領へ向ひ進慕しましたがその途中のことです

自分は秋元軍曹殿の指揮下で長以下五名の道路上警戒斥候の一員として突兵の前方を前進しておきました

急進を許すには他部隊が一ぱいなつて

僅かな細道を行きますすると間もなく中十米もないクリークに出來ました

五十米向ふには橋があつたのですか其處を通れば遅くなると丁度そこにあつた小舟で渡ることにしました

誰か

「このクリークは流水が急だしこの舟は危い」と言つたので

「何アに大丈夫だ」と言ふと二つで

「是に乗り込み中迄まで來たと思ふ頃どうしたとか舟が顛覆せず

「あッ しまった」と思つた時はもう遅いのです自分は素早く舟にすかりつきました

他の者はと見れば二名は遠くに流され

て行きます流水が急は上に底が又深い

128

弁候長秋元軍曾殿は舟の下になつて姿が見
えません

「こいつはいかん」

と思つてゐると 程なく浮いて來ました

みんは水泳には自信はあつたのですが 何

分重の軍装それに長い行軍で疲れてゐるの

で自由が利かず 一時はどうなることかと

思つておましたが 間もなく到着した本隊

におき上げられ 危く命を救はれおました

舟を離れて流されておた 一人も落着か

した

「急がば廻れ」といふ古い諺を戦中にな

がら思ひ出したのでした

☆

☆

救命胴衣で救はる

歩四七ノ丸 歩兵軍曹 黒沢正己

昭和十二年十一月五日杭州湾に上陸し

尖兵小隊となつて泥濘の悪路を夜通し歩い

たやうな気がしたか 密命に入つて時計を

見ると まだ一時少し過ぎた頃でした

途中はつきり覚えませんが 三十回以上

轉んだと思ひます

其時に銃を投げまいとして一生懸命だつ

たものですから轉んだ時の烈しいこと少

し急な下り坂でした とても烈しく轉んだ

はずみに流の積りで前歯を少し打ち折リま

した

尚前進するうちに 尖兵の私達はクリーク

を渡つた所で 道を間違へ後に引返す途中

橋の上で後に居た河村班長が電燈を照らし

で出ました。それで何んの気分も歩
ておきたら 突然燈を消したので真
縁にクリークに落ちました

余り激しく落ち込んだので クリークの
底に顔を突込んでしましました

水中で どうなることかと思つておると
すうーつと浮き上り ぽかんと水面に顔が
出ました 誰かい引揚げて呉れたのかと思
つたが クリークの真中に自分一人が居る
のです

それは丁度救命胴衣を背袋に付けておた
から浮き上つたのでした

上陸の時に 各分隊は人員の半数だけ救
命胴衣を携行するやうに命ぜられて、初年
兵の自分が背袋に付けて行軍してゐた試で
す

厄介物にと思つてゐた救命胴衣が この
時許りは本當に有難く思はれました

他師團の將校から 煙草を貰ふ

歩四七、五 歩兵上等兵 矢野勝

十一月五日折極の濃霧を幸ひ無事敵前上
陸を敢行し 海水の中で戦ふこと約四時間
にして対岸に着きました

この時私は 煙草が吸いたくて
たまりませんので 物入れより出して見ると
皆ビシヨ濡れでず マツチも何にも濡れ
ておます

仕方がないので傍の戦友に聞くと

「俺も無く困つたおるんだ 一本呉れ」

「いや 俺も無いんだ」

「あ、さうか」

とひどく頼りになりません

丁度其時 百十八聯隊の將校の方が煙草
を吸つて居られました

私は心臓強く
小隊長殿 済みませんが煙草を一本吸は
せて下さい」

とお願ひしますと

俺にも一本しか無いのだから、この吸ひ
かけをやらうし

と半分程戴きました

私は本當に気の毒になつて遠慮しまし
た

吸ふてくれと下さつたので有難く戴
いて、それを七八人で吸ひました

この時 私は野戦といふものは本當に親
兄弟よりも親しく、その水も口や筆では言ひ

現すことは出来ませんが、一口に云へば我
身同体といふ程のものだとつくづく思ひま
した

機関銃を探し求めて

歩四七ノII階

歩兵留守會 尾川正高

曾て中隊の標語として「八馬一休の戦斗
威力発揚」といふ言葉が中隊の揚示役に

掲げられてゐたことがありませう

かの杭州湾上陸當時自分達は直ちにこの
言葉を味つて來ました

當時自分等が屬する中隊小隊は第六中隊に
配屬せられ、第一回の上陸部隊として、機

関銃を前夜より舟艇に積み込んで、何時で
も出発出来るやうに準備を整へておました

所が當時非常に混雑してゐたから、配屬
工兵隊が機関銃だけを残して出発してしま

ひました

監視兵を置いてあつたのですが、その六
隊が一才便所に行つてゐた留守なうで、何

☆

☆

んとも致し方がありません

七時三十分頃中隊主力と共に上陸 弾薬の陸揚げ象徴と終った後 小隊長殿は全員を集合させて機関銃の搜索を命ぜられました

午後三時頃大隊は出發してしまひました
機関銃は見當りません 當時の小隊長殿の心配は如何ばかりかと察せられました
五時頃からボツ／＼雨が降り出しました
日が暮れるのにも間がない 若しやと思つて輸送船利根丸のぎに連絡に行つた者も悄然として引揚げて来ました 工兵隊の責任は陸揚げが 今更らう様に續にまわります

まふと遙か濠の彼方から
機関銃が見つかつた

と叫びながら走つて来る兵隊があります
皆の顔に喜悅の色が浮びました
だが然し心配はこれからです 敵状地形

全く不明 主が部隊は何れの方角に前進したか皆目分りません 其上当地方の土民は諷かひどくて 北支では相当自信のあつた自分の支那語も 全く用をなさず 手も足も出ないと云つた状態です

クリークは網の目のやうに無数にあつて 向ふ側に渡るのに何千米も廻らねばなりません

雨は次第に激しくなつて来ます せう中で夕食を済ませました

弾薬箱の負荷は肩に食ひ込んで 後に引き倒されさうになります 道路と言へば泥濘の上に土質の潤滑か 又ル／＼と滑り相當の体力を消耗した自分も 此時の苦痛だけは終生忘れることが出来ません

ワリは次第に暗くなつて来ます 然も援護として四五名の小銃手が居るのやうに敵残兵の出没も予想されず

然し乍ら 中隊全員小隊長殿を偵察し

機関銃の威力に充分自信を持ち、
して本隊を求めて前進しました。

翌六日一時頃、小笠原部隊が入って休憩
する事になりました。勿論警戒兵を配置
し機関銃は何時でも射撃できるように準備
して、藁の中に横たわ

ウトくしたと思つたら戦友に起され
た。幸ひに雨は止んで薄く夜が明けおま
す。乾草をかがつて又前進だ。昨日より
も大分気持が落ちついて来ました。

やがて各所で砲声が聞える。そして右前
方に村落の焼けるのが認められました。小
隊長殿は概ねその方向を本隊の位置と判断
されて、その方向に前進するうち、十一時
頃大きなクリークに遭遇しました。

丁度其時クリークに沿ふ道路を、此方に
やつて来る兵隊があります。よく見れば戦
友です。其時の嬉しさは機関銃を見つけた
時以上でした。

もう大丈夫だ。大隊長殿や中隊長殿や他
の戦友達と一緒に、安心して銃斗が出来
るのだ。
と思ふと何んとも云へない気持で一一杯で
した。

そして十一時四十分過ぎに中隊長に復
歸したのですが、それまでの労苦と追及当
時の嬉しさは何時までも忘れぬことは出来
ません。

追軍前進に際し

歩四七五ノ隊 鈴木軍曹

杭州湾上陸の時は自分は弾薬分隊を隊
り少し遅れたのですが潮が満ちて来て困り
ました。さう上陸してみようと、道が悪く
前進も思ふ小様に出来ませんでしたが、兵
の隊長殿が自ら一生懸命に道を刈つて来
て道路に敷かれたのを見て感激しました。

生命の恩人

歩四七ノ六

歩兵軍曹 仲村渠 守一

かの昭和十二年十一月五日新鋭柳川部隊が海軍と密接なる協力の下に折柄襲來の濃霧を天興の煙幕として敵の背後を衝くべく潮の如く抗州湾に押し寄せ世界戦史の一頁を飾つた時であります。

舟の関係で岡崎中尉殿以下四名は他の舟で無事上陸を終へましたが、さて中隊に帰らうとしたところ当中隊は一停何処に進んで行つたのか、どつぱり見当がつかなくなりました。

右へ走り左へ走り中隊の位置を探してゐた時、私の右を肩を並べて走つてゐた伊東伍長が、拵から受けた側射に「無念ッ」

と一言其場に斃れてしまひました。やられたはず。

と思つた私は、傷の手当をすべく直ちに駈寄りました。か、不思議でならないので、血の一滴さへ無え然も傷が見当らないので

「こら伊東、傷は受けとらんがやばりか、しつかりしろ」

と肩に手を掛けた時、目をパチンと閉けて

「たしかにやられた筈です」

と右の胸をあたり出したので、見るとあつた！ 彈丸の痕が、然しそれは防毒面の吸収綿を射ち抜いて上陸の際身に附けてゐた救命胴衣に止つてゐるようです。

「たしかにやられたと思つたんだが」

と伊東伍長は、救命胴衣に感謝しながらも、余りの意氣地なしに齒噛みしました。總て中隊の位置も分り

「一度死んだ氣持で御奉公するのだ。然し生あつて凱旋するやうな事が若しあつたら、酒の一升でも買つて救命胴衣に挿銃して別れるのだ」と逆反して行きました。伊東伍長は今夜目出度く凱旋しました。果して一升買つたかどうか、若し買つたはずればきつと涙を流したことでせう。

味噌遍心

歩四七五ノ大行李・荒金上等兵

上陸後乍らでも金山附近と思ひますが、其の頃は調味品が渡らず困つてゐましたので塩を探して支那民家に行きました。すると部屋の中に綺麗な桶があるので、手を入れた見ますと「ドロくしてゐます。味噌じやないかな」と

桶の底が見ます。何んか人糞です。後で戦友に話すと、支那の女は寢室で神の糞味噌をた

何んか有るこりアー頂好ト

蓋あけられ
中の臭で没法子



決死の 弾薬輸送

歩四七ノ五HG

歩兵上等兵 山本 朋

時は將に十一月九日にして 丁度杭州湾
敵前上陸後四日目の事です

我等は小銃一ヶ小隊援護の下に 弾薬輸送
の任務を帯びて 水隊に追及してゐた時で
あります

天文台西北側約二軒手前の部迄にて夕食
を済ませ 着々として夜間行動の準備をし
ておきました

突如一八〇の出奔の命令下さるや 我等は直
に舟に乗込んだ 支那人に舵を操らせ乍ら
我等の舟は一列になつて七隻 暗黒のクリーク
を突進みます

援護隊はクリークの爲に廻り道して 我

等と懐中電燈で連絡を執りながら進んでお
ましたか 暗さは暗し余り連絡もよく執水
ず 我等は遂に熱武器状態になつてしまひ
ました

死の静かな静寂がヒタ／＼と身を包み 唯
掃を消ぐ音が聞えるだけです 戦友等は時
時低声を話し合つたり 獅愁にかけつたり
しておます

静かにしるし
と命令が来ました 舟は黙々として死の
様なクリークの中を行きます

(援護隊は何処に居るのたらうか)
と心踊しながら任務達成を祈つておまし
た

其内前方に 暗い中にも判然と眞黒の長
い舟影が見え出した

どうも不思議だ
と思ひながら灣を進んでみると 道がく
に從つて舟の数が加つてくる様です 尚道

づいでかるとは又どうしたニ。か全部敵
の舟です。高声で話し合ふの。答々入部語で
す。一寸懐中電燈で見ると。始末が舟の上
に立つておます。益々不思議でならない。そ
こでよく見ると。何人。これモこれモカキ
色の軍服が青い便服を着た支那兵が。銃を
持つて舟の中に潜りてゐるのです。

我等はこの意外な光景にすうかり面喰つ
て。直に舟を止めた。然し此の場を如
何せん。引返さうにも。人々に弾薬を積載
してゐるし。舟は七隻もある。並大儀。過
勞ではなく舟に着けて善後策を講じやうに
も。岸は險地です。

豪膽なる山田軍曹殿(現曹長)以下我々は

「ま、よ。面倒だ。」

とばかり共億敵中に入つてしまひました
進めば進む程敵の舟は増すばかりです
この時殺苦しいことはなかつた。無武義行
から斬り込まうかと思つたが。山田軍曹殿

が任務が重大なることを言はれたので。成
可く船に沿つて進むやうに。支那人に化け
て送るで済ませました。然し敵の舟は益々前
後左右に。舟、筏、板等に乘つた支那兵
が一斉に端集して。殆ど水面が見えない様
な始末になつて來ました。

残念乍ら任務の重きを自覚して。避けや
うと考へておると。天徳なきかな。右の方へ
ずうとククリクが長くなつて。部落の方
へ流れてゐるらしい。これ幸ひと其のクリク
を進みます。暗黒の森か支那人は敵か味方
か分らんらしい。

部落に上陸して夜明けを待つた。部落は
ククリクの左側に二十軒位有り右にも三十
軒位です。我々は右部落を占領しました。

其頃大陸の朝は白々と明け始めました
と遠くに見える天文台が段々判然となりま
した。

「お、天文台!!」

夕日の中には敵の敵が居た筈だっ
たが、何時の間にか彼等は姿を消してお
した

天文台東側二軒の山から、二小隊位の
ツンゴピンが最早戦意がなにもりか、こ
ちらを見てもニコニコ笑ひ乍ら、どろ／＼と下
りて何処ともなく行つてしまひました

嗚呼、考へてみれば不思議なものです
勿論死を覚悟しておたもの、お水程の敵
中に居ながら一名の損害もなく本隊に追及
して弾薬を補充しましたが、援隊とは列頭
連絡が執水ぬまゝでした

残留者を指揮して

歩四七、ⅢBIA 阿部曹長

愈々十一月五日一八。頃我が第三機関銃
中隊は上陸を開始し、自分は一番最後の舟
で上陸しましたが、附近には陣地が沢山有
るし金山衛の西方には盛んに砲声がしてお
りました

機関銃中隊は二手に分れて上陸しました
が、第二小隊と弾薬小隊は未だ船中に残つ
ておりました

やがて大隊本部は進軍に移りました。こ
の時営時の中隊長松田定作大尉殿から

「阿部は残留者を掌握して来い」

と命ぜられ、又師団司令部で機関銃要員
として三名やることになり、その内の一
名は既に上陸しておりましたが、他の二名がま

☆

☆

だ上陸してゐたが、此処に残つておまし
た。それでは陸部隊を運ぶ工兵の兵隊に

「もう一回舟を戻して呉れ」

と頼んで待つておました

折柄雨は降さず、ズンズン濡れて、救命胴
衣などを沃山着て雨を凌いでおました

所が二二三。頃迄待つたか一向来ません

それで、も一名の甲斐鷹時上等兵と共に時
計を規整しておいて、三十分後に現在地に
於て再會することにして上陸者を探しに山
掛けました

こんなことを三四回及復しましたが、結

局見附から、上陸の隊司令部は海月
庵に居るといふことを聞いておましたので
此処に連絡に行きました

そしたら

「上陸中止になつてゐるから明朝迄待つて」
と言はれ、仕方がないから部落に入つて

自分の野隊の者を探すと、大隊砲が居まし

た。ホツとしました。それでは大隊本部の残
員の泊つてゐる家に泊り、翌朝岸に行つて
みました

獲て朝霧の中からエンゲンの音がし始め
一番先に中隊が上陸つて来ました。早速昨
夜策懸命を探し廻つた横関銃要員を師団司
令部に先行せしめ、自分等は大隊砲と共に
金山嶺に向ひ追及しました

自分は大隊砲の小原敏真少尉殿から地図
をお借りして、一生懸命に之を見、金山嶺
まで行きました

此処の城壁を出ると小さな道なので、部
隊は通過が出来ず行軍は滞滞します

金山嶺で晝食を食つたのですが、夕方迄
あつちこつち道を探したが分からず、折柄來
らぬ大聯隊砲中隊長井上、豊大尉殿(現少佐
第三大隊長)の指揮の下に、石橋や畔道を通
り、一。頃迄歩きました。結局千米程行
つて部落に着きました

この時程からいへば、さる事はなかつたが、張口鎮で後から来ておた等の聯隊砲が、すつと進んでクリークに並行して松陰鎮に向つてあります。

途中丸太三本の橋を渡るのに、中程の所で機関銃が駄載の儘、兵と共に川の中に落込みました。

こんな調子で四頭の馬を列頭渡し、この日は五頭落してやがて松陰鎮に着きました。それからは馬は行けないので、機関銃は馬を四頭大隊砲も馬を残し、それには駄兵も共に金山に廻ることを命ぜられました。自分も残る筈な力かすが、どしどし第一線に出たくてたまらず、無理に履つて舟に乗つてみました。

それからクリークを渡つて一里程行つて夜を明けました。腹はへつたが飯は食はず、金山に廻した駄兵のことを心配して、西の時、井上大尉殿から

「阿部御苦勞だが、お前行つてくれ」と言はれて大隊砲小隊の地図を借つて高嶺義夫上等兵外三名を率い、翌朝クリークに沿ふて松陰鎮を過ぎやがて金山らしい部落に入りました。

然し一向彼等の姿が見えないので三千米位行過ぎて、丁度百十八師團の兵隊が居たのが訊いてみたら

「知らん」

と言はれ、別辺しました。今度は工兵が居たので訊くと

「金山は此処だが、昨日やうて来た馬は今朝奪つた」

とのことですが

それでは

と懸命になつて後追ひかけました。奪ひ得かにして彼等に逢ひましたが、彼等は自分の顔を見て

「丁度逢へて良かった、この儘でどうしや

うかと不安で仕様がなかつた
と本營に焼しようとした 自分も皆の衆
申な顔を見てホツとしました

土左衛門のなり損心

歩四七 齋藤本陣

歩兵上等兵 高木峯雄

金山を出發して四五里前進した頃はもう
夏の間にした 其の上道が暑いので田圃
中を歩いて行きまじた

すると 誰かクリークに落ち込んだらしく
クヤア /> やつとみます 二三人は居る
様子です それにクリークも深いやうです
私は早速水面に身を入れました 運よく誰
かの手を掴りました

「ヨイシヨ />」
と ヤツとの事で引上げると 此が支那兵

の死体です

「こん畜生ワ」

と又クリークに落ち込んで

「こつちだ />」

と叫んで一人の手を掴みました

今度は温味のある手です

苦しませられた相手を無我夢中でしがみつ

ものですから 足が滑って私も共に落ち込

んでしましました

案の如きのクリークは仲も深いのです お

まけに底が泥でどん /> 沈んで行きます

心細いこと此の土佐しです 和ヤ /> して

ぬると土左衛門です

「坂本 /> 早く来てくれ」

と叫んでヤツとの事助りました

この時程ビツクリした事はありません

小銃一挺で
部隊追及

歩四七ノIIA

歩兵軍曹 藤井萬治

杭州湾を上陸する時 中隊は十一月五日
に上陸しましたが 分隊は六日の午後にな
って上陸しました

その晩は金山衛城の守前の部落に泊つて
翌朝一〇〇〇頃出発して金山衛を過ると
雨は降るし 馬や彈薬馬が通つたりと道は
とても悪く 馬など兵隊が引張る程でした
それに兵力一ヶ分隊で小銃が一挺あるだけ
だったので 心細いことはこの上なりました
た 此の日は一七〇〇頃迄歩いて或部落に
宿営しました 所がこの道の悪い為 今
朝発つた部落は実に直ぐ日

其の間 山砲は畔道を行つたのですが 我
々は敗残兵から時々狙撃を後けました
途中砂糖黍が沢山ありましたが 目にも入
りませんでした 初て此の部落に着いて見
ると 却々大きな町です それで皆微聲に
行きました 此處には憲兵が七・八名居
て その大佐殿から

「頼むぞ」と云はれて 兵力は少ないの
に氣持だけは大きく派りました 又の夜は
小銃一挺で警戒しました
翌朝出発して河の線に出ました 其から
先は道が分らず 幸ひ河に筏があったので
此に憑り「何処にでも行け」と云小積で対
岸に着けました 又して方向も何人にも格
別判然としないうちに 鬼に前前進して或部
落に着きました 此處に着いたのが一ニ〇
〇頃でしたが 却々物資も多く 他兵糧も
し だが 翌朝起きた時には もう

彼等は居ませんでした

其の日 漸く金山に着き

らず 旅團司令部が居たので早速調べた

ると 聯隊はずつと後だと云います

それで昨日の河まで引返しなした

暗くなつてしまひました

ので此で渡りました

うにも動きがとれません

逢つたので 此処に泊めて貰ひ皆と評議を

しました

聯隊はもう直ぐだと思ふが 道は悪し 外

は真の闇だ それに附近には敗残兵が沢山

居るだらう これからどうするか」と云つ

て見ました

然し聯隊までは もう一里しか無いと云

ふので 松江まで行きました

分らなくなりました

此処で泊ることになりました

幸い 機関銃の弾薬小隊が行くと云ふので

助け舟とばかり一泊に行く事になりました

一里ばかり行つた時 突然敵から射

前から 「速射砲前へ」と云つてきますが

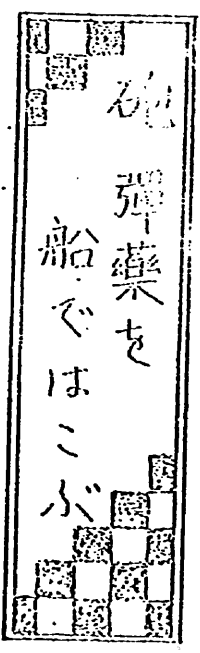
小銃が一挺しかないので 此んな悲惨な

事になりませんでした

早く中隊に復歸しました

此の時

経緯はかつた事はあります



歩四七五 BIA

歩兵軍曹 上ノ段 重義

上陸の時私は櫻木隊の指揮班で安部曹長
以下 岡本前田それに私の四名は連絡の

其の時でした。鉄橋附近に一大音響が聞え
ました。弾丸は盛んに乱れ飛んでおりま
す。ひよつと頭を上げれば友軍の飛行機で
す。

「お、友軍の飛行機だ」と誰しも叫ばな
い者はなかつた。(やつぱり皇軍の飛行機
だ。我等の激戦を助けにくれるのだ)と
と思ふ神様に手を合せる様な気持ちでした。
飛行機は数回に亘り爆轟を加へ、今迄鉄橋
附近に居た頑敵も此の爲に総崩れとなつ
て西北方に向ひ敗走しました。
時正に一八三〇。遂に滬杭甬鐵道も遮断
日章旗は夕陽を浴びて鉄路高く輝えりまし
た。



七百名の敵を捕へる

歩四七本部 羽矢軍曹

杭州湾を上陸して聯隊本部附で二線中隊
は各二百発宛彈薬を携行し、自分は後の彈薬
を海月庵に集め、大隊小行李も纏めて一線
へと十日に出発しました。

十三日に松江に到着して、それから二里半
ばかりの所で一本道路でした。前方に支那
人が沢山居ました。
此の時自分達の兵力は十二中隊が分散兵を
集めてしめて約一ヶ小隊、小銃が四十挺ぐ
らゐりました。クリークの岸に戦斗準備を
しました。

敵の將校らしいのが前方二町位の
の所で止りました。それで此方も前進しま
した。敵には全然戦斗意気はなく

千エウコ五小銃百三十
夫敵が道路の両側にズラリと集りました
七百名位居りましたが、早速先ず武装解除
をさせました、小銃には全部破壊してあり
ました

(此れだけの人員が、それと比較して殆ど
戦斗力のない我々に向つて来れば、
まりもなかつたのだ) と後、ホーツと
したことでありました、是等の兵器は韃靼
兵に持たせました

歩四七五六一

歩一 郷 九郎次

大船を後に大陸踏心地

酔覚めて暗がりには飲む水の味

戦友の骨抱いて今宵も草に伏し



歩四七五六一

歩軍 若杉 眞揚男

足痛に歩ませぬ兵を叱りつゝ、

國のためぞと我も泣いたり

畜生と敵の血頭踏みつけて

足の痛さと飢さを忍ぶ

心よ濡に兵を勵まし

陣地掘る

敵の方にも雨降さざと

なつかしの我故郷よ夢に出で

露にぬれたる我を慰まむ

雨降れば戦友を想ひて胸痛む

今何処に居るかと

0147

青浦附近まで



危し支那の第五列

歩四七五・六

首藤伍長

上陸してから尖兵小隊として追及に移りました

金山の街に入りかけた時です。犬一匹居らんと豫想した街から、年頃二十五六の姑娘が出て来ます。そして私達を見ても別に逃げようもしないのです。小隊長殿が呼びにやられて

「敵は居ないか」と訊ねられると

「二日前に日本軍が通ったから、誰も居らんと答へます」

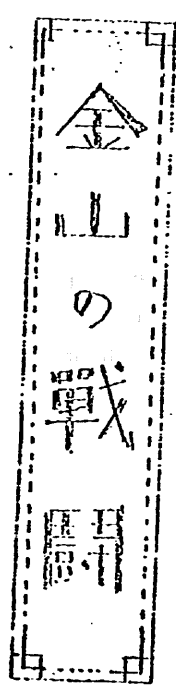
「か、五師團だらうか」と訊しながら行

きますと、小隊長殿が

「警戒を怠らな」と注意し

尖兵擲弾筒を加へ、輕機はた、擲機

と命じて行かれました
そこは丁度街の入口で、二十米の高低が
あり竹藪があつて、そこに二軒家がありま
した。尖兵が街に入り終へた頃、突然その
一軒家から猛射して来ました。衆の定しと
すぐ配備につき、擲弾筒を射ちますと、二
三べんで動揺しはじめ退却しましたが、す
んでのところで支那第五列の筒食になつと
ころでした



歩四七II、六
中村軍曹

金山の手前のぬかるみの中で、足を洗ひ
地下足袋を草靴に履きかへました

伏して居ました。道に仰向けになり
敵は盛に奇声を張り上
げては、思ひ出したやうに射撃して来ます

鹿やどこの騒ぎぢやありません、丁度
分隊の居たそばにコンクリートの家があり
ましたので、右から射つたら左、左から射
つたら右へと移動し、私は軽機の上におし
かぶさるやうにして、不気味な一夜を過し
ました

抑曉と共に金山を強行攻襲することになり
街に入つて見ますと、先刻四分隊が占領し
て通つた筈の道路筋の二階家に敵が居て通
れませんが、私の小隊はこの生意氣な敵を
攻襲することになりました

友田伍長の指揮に入つて行きますと、大分
射ちます。そこで手榴弾を投げ込みますと
やつと逃げかゝりましたので、それを点射
で射ちました

追かける様にして入つて見ますと一人薨れて居ました 見ると赤いものを持つて居ります 久留米青年學校寄贈の國旗でした 國旗を拾ひ取つて進んで行く又射ちかけられました

とても首が出せません 四方から街を囲まれ 処置に困惑しました 軽微を射たうとしますと故障です 家の中に入つてなほしたと思つて 五発射つと又故障です

植松曹長殿が

「どル 俺にやつて見い」

と言はれて 家の中に持つて行つて調べら

れどが 故障らしい所はありません ヒョイ

と弾を見られますと 故障の筈です 弾が

入つておません 一同敵を前にして

「慌てるな あわてるな」

と大笑ひでした

えいからケマン / 射ちまくり 敵を退

してしまひましたが 全く慌て、おたゆと自分身がらをかしくなりませんでした

黄浦江の殲滅戦

歩四七五 本部

宗 上等兵

友軍の犠牲が少くて 胸のすくやうな救をしたのは 黄浦江を遊つてくる十五六隻のジヤンクを打沈めた時です

三大隊は前衛として聯隊本部と一緒に行軍してわたつてですが 天支谷を通過して約三

時間の間に露営することになりました

夜も十時過ぎに頃 轟々と迫る寒気におも

やうで 露 雪を見上げて 戦場の感涙に

耽つてゐた時です 上海方面から退却の敵

でせう 赤白黄の信号弾を射ち上げて逃げ

て来ます。それを休憩中の軽装が「好む獲物」とばかり射ち出すのを、司令官

「聯隊長命令 弾を射つな」と飛んで来てとめました。

敵は友軍がゐるのを知つて方向を変へたのか。何の音沙汰もありません。

暫くすると、河下から舟が十五六隻上つて来ます。コシ／＼と火器を総動員して猛射を加へました。阿鼻狂喚、地獄

な叫びの光景でした。敵は施す術もなく、悉く水底に沈んでしまひました。

三十分程して又元の静寂に歸りました。あんな殲滅戦は未だ嘗てありません。

殲滅のあとさりげなき、夜空かな

道にふす戦友の遺骸の安らぎ

黄浦 附近まで

歩四七五十一一中隊

座談会より

上原曹長

杭州湾上陸の時から、私は聯隊本部付となり、親しく長谷川聯隊長殿の御薫陶を受けました。

金山迄の行軍には何べん轉んだか判りませんが、師團長閣下は竹の杖をついて行軍して居られました。その様を見て思はず眼をそむけたい程でした。

十一月六日の朝、出発準備をして居ますと、旅團長閣下が「トコ／＼来られて

「今日は好い天気だなあ」と言はれたのに、聯隊長殿はなせかツンとして居られました。皆顔を見合はせて、うちの親父は愛想がないなあと思つて、閣下に御氣の毒な様氣持で眺めました。

荒金中尉

杭州湾から崑山迄の間は、中隊は戦斗をして居ません。といふのは、船の荷物整理にあてられたからです。たが棚からボク餅式の詔があります。それは、彈藥車輛部隊の護衛に第三小隊をつけてやつた時のこと。松江を去る一里半位の所で、敵の大部隊を捕虜として連れ去つたといふのがあります。

芦原軍曹

今の中隊長殿のお話ですが、松江を朝の

七時頃出発しました。

横光分隊が路上斥候となり、部隊の一九〇米前方を前進。その後、に車輛部隊が続行。その車輛の間に、二個分隊を適當の間隔に配置して、一個分隊が後方警戒に當りました。道の曲り角の所で、向ふから十名ばかりの白旗をかかげて来るのに出逢ひました。

斥候より報告がないので、小隊長殿が駆けつけて見られますと、どうやら降伏して来たらしいのです。都合のいいことには、小隊の阪部上等兵が少し支那語が話せないので、訊ねさせて見ますと、向ふの部落に同僚が七百名許り居てみんな降伏したいと言つて居るとのことです。

七百名……一寸想像のつかない話です。此に自分達は一個小隊、車輛部隊なんて戦力には無いも同じです。敵に抗戦の意思があるとするれば、これは大変な事です。

それでこちらは慎重にかまへ、三個分隊で
武装解除に当り、他は全部戦隊形をとら
せられました

二十三聯隊の大隊砲も通り合はせましたの
で、これにも陣地進入をして貰ひ、降伏兵
の末ののを待ちました

さうして待つて居る間に、崑山から帰り
の軍參謀や軍属の方も来られて、やかに向
ふから長蛇の列をなして、此方へ来る支那
軍を迎へました

皆還しい顔付をして居る、無表情な彼等
の神經に隠されておろのか何だらうかと一
才たじろぎもしましたが、虎穴に入らずん
ば虎兇を得ず、と武装解除をさせ、軍属に
たのみ前進しました、其の時がつくりした
のは、彼等の持つて居た書類の中に、出
征当時の六師團の中隊長以上の名が全部
載つてゐたことです

上原曹長

これは實際、特ダネだつた、来るも来たり
七百名の降伏兵を見た時、私はもう戦争は
ちと済むと思ひました
奴等も今頃は皇軍の協力者として、新支那
へ力強い生命を吹き込んでゐることです

平島上等兵

黄浦江で汽船や帆船を見、ホー、こんな所
にも船が——と感歎の声を發して、船前進
し、河に面した村落で、露営することに成
りました
早速好きな食べ物はないかと、永田上等兵
と二人で行きますと、家の影に一人の男が
うぐくまつて、苦しうに喘いでゐます
すかして見ると敵兵です、暫く佇んで様子

を見てみますと、負傷でもないが、如何にも苦しさうです。起して調べて見ますと、何も持って居ません。そして世の終りの様な顔付で、腹を指さし、ウーン／＼唸ります。可哀さうだったので連れて帰り、ウレソートを飲ませて部屋に隅にねせておきました。一晩中、厠に往復してはハイ／＼呻き、泣いておりました。おかげで、おれも眠れませんでした。

翌日は共に歩いて歩けんと思ひましたので、分隊全員で、病に罹つた敵兵に贈る義捐金を募り、勘い糧秣を分けるとか、後から来る友軍に依頼状を書いてやるとかしました。たら、すっかり感激して、慟哭して居ました。

ことごとくに静けさ、増すや虫の聲



張庄附近の戦闘

歩四七、五、六

歩兵軍曹 孔井三郎

金山戰鬥に疲れを休める暇もなく敵を急追。其の第一日目です。

私は因崎中隊中村小隊第一分隊として戰鬥に参加しました。

杭州湾上陸以來、よ／＼と降り続いた雨もどうやら晴れさうになりましたが、其でも細畦道の前進では、尻餅をつく者が相当にありました。

八日の夜、南庫渡河、一〇〇〇頃、たつたと思ひます。中村小隊長殿は將校、兵隊長となり、第一分隊の軽機と第四分隊の擲弾

筒をもつて南岸―張庄間の敵情に遼路
偵察の命を受け 南岸を同時出発して 河
の右岸を前進しました

途中クリークが多くて前進に困難を見まし
た。え水はクリークを渡すため舟を採して
はクリークに渡し 道を造つて前進したか
らです

そして次のクリークに至れば舟はなく 初
めクリークを造り 橋をかけては前進又
前進すること四五回に及びました 川上を
見れば 上海―杭州間の鉄道の鉄橋が 水
に浮かんで見えます

警戒しては前進又前進 銃につけられた日
の丸の旗は川風にひるがへり 太陽はむし
暑く我々を照らしておりました

その時中小隊長殿が、止れ、と言はれ
ましたので 急に停止し四方を見廻しまし
た。すると左前方に西米の部落から 左に

右に黄東を被った者が盛に移動して居る

丁度内地の聯隊にあつて 仮設敵が偽装し
て移動してゐるのと同じで 数十人もみと
めました

直に小隊長殿は 軽機左の基地に着けと言
はれりなり 擲弾筒を率いてすぐ後のクリ
ークまで下られたやうでした

第一分隊は手早く基地に身を寄せました

あたりは総徳が黄金の波をうっておます

すると墓地の向ふから 土民の姿をした者

が一人現れて 振り返りく 私達の方を見

ながら敵の方に行きます 誰言ふとなく同

時に
「你 未々」

と呼びかけましたか 平気で行きます 積

にさわり 私は国旗のついたまゝの小銃で

一発ぶつばなしました みごとくに命中した

らしく 黄金色の波の中に倒れました

またと同時に敵の第一弾は早くも捜索の端
上をかすめ、ハズリと音を立て、側の方
に當る。そのはずみに私は基地におさまし
た。

それからとさふものは、死生を忘れて、只
敵をやべ、けふ一心でした。

チエツコ 小銃 迫撃砲の息をつく間もな
い程とんで来る。

高橋一等兵は軽機銃の射手として盛んに射撃
して居ました。敵がよく見えな、為か
基地から出て射つので「危い」と声をかけ
て、直に私の小銃を殺にわたし。軽機銃を私
が取り、基地の左の竿畑から、敵のチエツコ
弾めかけて、首を出す奴を横なぐりに射ち
まくりました。

其の時、右に散開してわたる魚野一等兵がや
られた。と隣りの誰かが言ったのが耳に入
りましたので、私は

「しつかりしろ、どこをやられたんだ」
とさかました。弾音に遠ざかれて聞えない
暫くして

「両手を射たれた」とさふのをき、
「弾の来ぬ所に下がれ」

とわめきつゝ、も、射撃を中止することなく
猛射をしました。

其の時中村小隊長殿は、抑弾筒をひっぱって
クリークの左に前進、第一分隊の左後方か
ら、榴弾を前方部隊に射ち込む
ようし、三發射で

と、小隊長殿の音が、手に取りやうに聞
えます。

いつしか第一分隊も、小銃弾が七八發を
射ち、くし、後わがかと、小銃をまく
分隊長の野佐長殿は、「あまり射つな」と言
はれます。

敵は目の前にあらうき、右に左に移動して

居ます

「弾」夕マの補充は……と言ひますが、後

方部隊はまだ……には来て居ませんが、

其の時、稲田の中をジマズくバタ／＼と

「ホー」弾座夕マを持つて来たし

といふ声、一可振り返つてみると、開本一

撃兵が弾座をソウと稲田の中から投

げてくわさ、よし来たしと力きもり返して

敵を射つ、其の時敵の一弾は残念にも私の

頭部にあたりました。しまったと思ふと

同時に気が遠くなりました

何かの物音にふと目がさめてあたりを見廻

せば、小隊の戦友達が、しつかりせしと声

を掛けて居ます

護衛して、北部張庄で師團殺護班に收容
されました
私、此所で治療を受けましたが、傷は頭部
擦過銃創で大した事はありませぬ
一夜さこ、で過ごし、九日朝は非常に気分
がよいので、無理にお腹かして、小隊と共
に次の戦場に参加することにになりました
張庄の敵は約三百でした
海軍隊も協力し、この敵はほとんど全滅
し、私共の兵をうったと、戦友が話してく
れました

陸軍刑法で處罰

歩四七五、五

矢野上等兵

青浦に夕方着いた時です、何かお茶を

探しに行かうと思ひましたが、思ひ止まつて炊事をして居ますと、戦友河野が鶏が居るといふのです

それではと行きますと、破壊された座屋の隣に一軒少しもいたのでぬいひのひあります。中に入ってみますと、成程居る。しかもトヤの中に入つてみるのです。これは御町囃にと、何の考もなく、十五六羽居たのを一羽だけ残して締め殺し、思はぬ獲物に、戦友蓮が喜ぶ顔を描きつゝ、帰らうとしておますと、そこへ少佐の方が入つて

来られました。ハツタリ出逢つてしまつたのです

少佐殿が、私の手にぶら下げた鶏に、うんと眼をそゝがれたと思ふと、われ鐘のやうな声で

「この封印がわからんかい、いやもう一べんに足がすくんでしまひまし

た。さつきは気もつきませんでしたが見ると、ちやんと奥兵隊の封印が貼つてある

「自分が破つたんではありません」

と言ひ訳しても聞かすればこそ、刀の鏝で、いやといふほど叩かれ、怒られました。つくづく清くなくなつてしまひました

「まだ居るか、調べて来る、行て居れ」

と言つて、奥の方に入つて行かれました

業の足、扉のかけに小さくなつてゐた他の

中隊の兵を三名つれて来られました

かかて兵站につれて行かれ、前属隊中隊

から、冒著級氏右造書きとめられ、陸軍刑法

に依つて處罰すよと言はれるのです

これにはさすかに自分も震へよう、敵呼の

声に送られて、勇んで故郷を出たのは何のためだつたかと思ひ、泣き縋つてあやまりました

夜おそく中隊長殿がまらりて 詔つて下さ
つたおかげで やつと許されましたがあ
んな心配したことは 生れ始めてあり
ました

昨日まで



歩四七五ノ五

歩兵上等兵 阿部 節鬼

昨日まで共に勵まし勵みつ、
お國がまりのなつかしき
はかなく消えた思ひ心の
銃とも戦友の尊さよ
こゝに興亜の陽は出づる

昨日まで共に進んで戦った

戦友が命を歩兵銃

わびしく光る菊花章

無言の銃の尊さよ

こゝに興亜の陽は出づる

昨日まで君が肌身につけてくれた

やさしくくしの御守を

釋してまよめる遺留品

戦友のいさをの尊さよ

こゝに興亜の陽は出づる

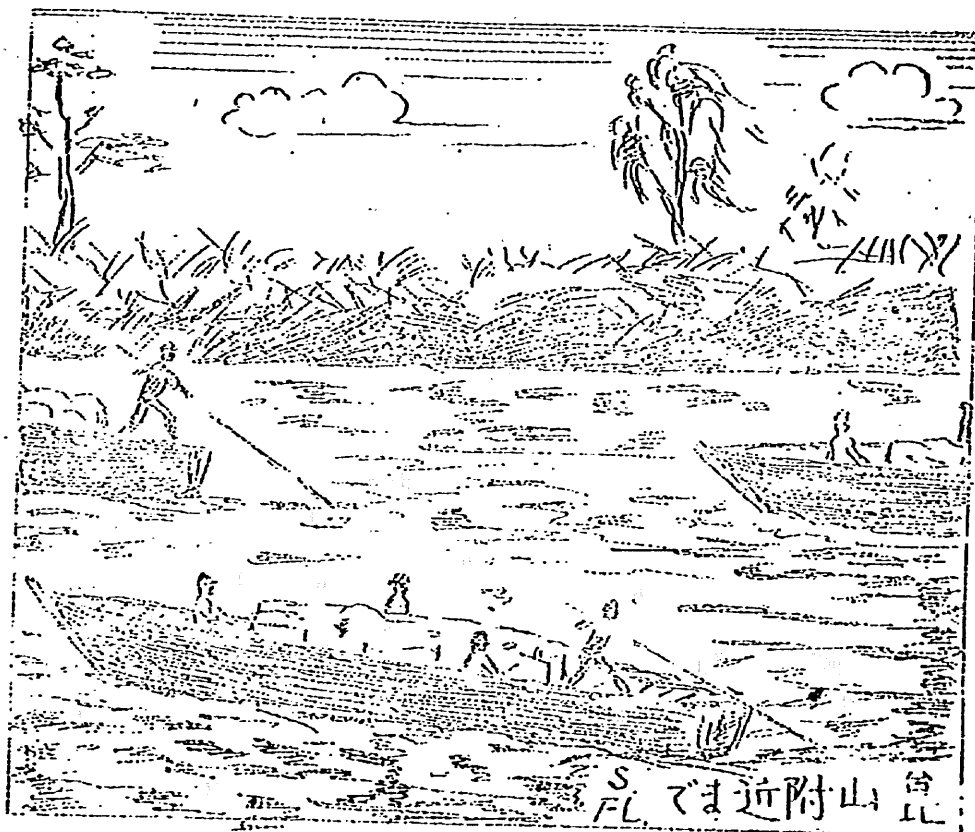
昨日まで綾山河を踏み越えた

赤銅組のあゝ尊厳

今は護國の人柱

無言の戦友の尊さよ

こゝに興亜の陽は出づる



目次

1. ぬかるみ地獄 野病第二 輔佐 松下重雄
2. 名薬、鶏のス 衛生隊 本武中尉
3. 泥濘をゆく 野病第二 輜上上堅景和
4. 思出の水路行 野病第二 高本幸雄
5. ボタ子と大尉殿 野病第二 輜上 徳田 公
6. 苦心の給水班 野病第四 衛生少尉 東條末彦
7. 人情不人情 野病第二 衛軍 西富静夫
8. 悪路の黒着送 野病第二 衛軍 迫田重盛
9. 恐るべき病魔 野病第一 衛軍 赤池克己

ぬかるみ地獄

第三野病

輜重兵伍長松下重雄

十一月十七日 杭州湾水登当時から不気味な雨しきりに降りつゞく中を 我が第二野戦病院主力部隊は病院開設の目的で先発しましたので 我々行李は 輜重兵第六聯隊第六中隊長山本大尉殿の指揮下に入りました 糧秣は残余の米や豆に 梅干二樽味噌四本しか携行致しませんでした
二三日行軍を続ける中に道路は益々悪く膝を没する様になりました 一日の行程やつと一里許りしか進捗せず その上日一日と糧秣は少くなる一方でした
人馬共に疲労が見えて來ます
部落を見出して宿営すれば 同時に明日の

糧秣を探さぬはなりません
んちにして 餓と寒さと闘いつゝ日夜行軍を続けるうち 慰安の煙草もつぎ果てし他部隊の残りして行つた短い喫いさしを捨てては 互に分ちあひながら喫つたりしました
先発の本隊へ追及する目的をもつておましたので 文字通り日夜不眠不休のありさまで行軍を続けました
一歩踏み下せば次の歩を踏み出すのに 軍靴の甲の所に土が盛り上つて へばりついて來るのでした 重たい足に尚更上の重みまで加り その感じは実に嫌なものでした
馬はそんなことがありませんから どうしても歩くのが便利でありまして 却つて人を引きずつて 行く様は恰好です
引きづらぬ 車輻の下になつた兵隊もありました
泥の中に入り込みますので幸に

負傷はありませんでした

道なき道を開きつゝ、田圃の中を踏みわけ

踏み分け進む行軍にクリーフさへ教ねず、

心は急ぎますが、人馬は意の如くならず、

苦々惨憺すること十日、余り、漸く金山に到

着致しました

到着するや疲勞は一時に抑寄せ、愛馬の數

頭は跛を引摺りつゝも、馭兵の誘導に従つて

ゐるし、又入院する兵すらありました

名薬 鶏のスープ

衛生隊 本武中尉

杭州湾上陸後金山衛附近では、人馬共糧秣の補給はなく、命令は束す、節園は何処で

何をじてゐるのかぎつぱり判りませんでした

節園との連絡を無線に頼むも、それも出来

ぬとのこと、幹部は協議の結果、兎に角

金山迄自力で行こうと、言ふことになり

金山衛を出発したのであります

ところがあの附近は非常に道が悪く、その

上クリーフは五百米おき位にあり、之に架

つておた橋も殆んど壊れておました、泥水

は膝を没し、馭兵は足をとられ、倒れれば

起き、起きれば倒れ、して全身泥に塗れ、目ば

かり異様に汚つて、田舎の田植よりひどい

有様でした

馬は輸送船中の永い運動不足のため、軽く力

が減退してゐます、朝から晩まで死物狂ひ

の努力をして、一日の行程はやつと千米位

で千五百米も進むのは上出来の部です

馬糧もなく、人糧も盡き、馬は力つき、斃

れるもの日に増し続々と出て来り
(之がはいかぬ何かいゝ方法は無いか)と
考へた擧句

鶏のスープを飲ましてみやう

と言ふことで試みにやつてみました

翌日になると馬が非常に元気がいい、兵も
元気づいて居ります

おめた、これだ

と幹部一同は雀躍して喜びました

こんなにして漸く金山に着いたのですが

一寸しに思いつきが斃死すべき馬の命を救つ

た訳で、今でもそれ等は忠実に働いておま

す

泥濘をゆく

第三野砲 輸車兵と上野景和

三月二十五日の朝はもうすつかり明けて
おきました

今日こそ本道路上に出られると言ふ喜び
のために連日の疲労も忘れて愛馬に馬装す
ると、宿営地であった松蔭小学校を出発し
て、昨日脱駕した泥田圃の中に馬をひき入
れしました

泥田圃の中には、遠く幾條かの轍の跡がま
だ幽に残つておりました。このぬかるみの路
こそは全孫娘橋出来以来八日間、どんなに
私達や愛馬に苦勞させた事か――

軍靴も、馬の蹄も、車輪も蓋くありこんで
その進軍の労苦はとも、筆舌にはつくせま
せん。悪戦苦闘、正に死に勝つ身苦の前
進をつらひて一日に僅か半村か一村――
膝と没するどろくろの田圃の中で、股を取

られた馬は、引き抜かうとじて自分の力で
はつたり倒れました。それでも起きよう
ともがいては益々めりこんでゆく。やつと
車輪を脱し、馬を起して、五六名で車輪を
引き出して馬をつける。そして榛木に手を
かけ、少しでも軽くなれば——と引っぱる
やうにして頼いて来ると、そこには又クリ
ークが意地悪く横はつておました。
クリークの通過は、車輪が転覆し馬諸共落
ち、み易いので、疲れ切った私達には最も
いやな難所でした。
そこには僅かに車輪が通れる位、木の枝や
藁や土を敷いてある。それもいつしか壁土
になるやうなねばりした泥になつておま
した。

私の前に丸山一尊兵が前進してのせいで、
馬の肢は藁の中に入ってしまった。駆装の足も
木の枝にひつかかり、アゴといふ小間の

丸山の体は車輪の下敷になつておました。
一旦止つて一息入れた馬は頭をニミ回振つ
てもう力一杯頼み出した。
満載した車輪は彼の背中を越して、やつと
クリークの向ふ側に渡りきつて止り、主人
の肩をいのを訝しげに振り廻つておます。
轢かれた彼は、それでもどうにか立ち上つ
て車輪を追つておました。
下が索だったので何も怪我はなかつたので
すが、選しい精神力と尊い責任感から痛み
も忘れ、雄々しく立ち上つたのでした。
こうした事を幾十度となく繰り返した。後
をみれば思はず身ぶるいして歩き出しまし
た。

腕袂の空には千切れ雲を浮かして、日が燦
燦と輝いておます。征衣は泥にまみれま
で泥人形のやうになつておました。土気
は益々天を衝き、南京進軍以外に私達の目

船はながつたのです
かつして僅かづゝ泥濘道車も統けてゐるう
ち 坦々たる南京路が見えそ来まして
愛鳥は何事もなかつたやうに只黙々と歩き
轍の音も軽く澄み渡った秋空に消へてゆく
金山に着いて 無限の感謝と愛情をこめて
平頸を軽くたいて 無慮しなげらういっも
より多くの馬糧を喫へたのは 十二時一寸
前でありました

田舎出の水路行!

第三野砲 高木幸雄

愈々上陸開始です
水隊の出發後 船内勤務のため後に残され
た我々檢余名の者は その日に折返し衛生

材料降場のため迎へたことにまつての
た玉兵隊の小舟を待ちました。その日は
とうとう 霧をみせませんでした。翌日も朝
早くから 待てど暮せど来さうにもありま
せん
夕方頃 同船して居る建築作業隊の上陸部
隊の中に割り込んで 本隊との連絡のため
岩本軍曹と二人 新敷場に送つて貰ひまし
た

上陸第一歩—— 砲車や輜重車 その他
雑多の物でそこらあたり一面一杯でした
次々に上陸する部隊は 左に行くもの 左
に進むもの入り混つて大混雑です
早速連絡所を見つけ出し 情況を聞いてみる
と 早や師団司令部は八里程前進し 病院
も昨夜出發した筈だと言はれて 途方にくれ
てしまいました
あたりを見れば一面に草畑が振まされた等

が 點々と小山をなしておます

上陸する時 別に糧食の用意をしておませ

ん しかし本隊に追及するにもどうにかな

ると思つておたのでしたが 水をみて食

小ことが頭にピンと来ました

それ以外の情況も集め得ず 致すなく今夜

は先づ此の附近で明す考でした せれど人

の行く跟について人家のへ行くうち 何

の気なしたにひよいと前をみると 赤十字

旗が眼に寫るはありませんか

もしかしたら自隊のものが残つておるかも

知れんと思ひ乍ら行つて見れば まだ隊長

殿はじめ皆元氣な顔が揃つておました

患者の後送もすみ 別に多様な様子でもな

く 一同は我々の材料揚陸を待つてぬるの

でした

情況報告後 小舟の請求も出来ました

材料が揚陸し 翌日(九月)には 本隊は

前進しました

X

X

X

後に残された即ち追及する者 残置材料有

視者約二十名ばかりは どうして良いやら

さつぱり見当がつきませんでした

金山衛城内の兵站部に連絡しておますと

十日頃工兵隊の折疊式舟が前線に行くか

ら それで遅んでやる

といふ話でしたので 其の日の夕方迄に

城内近くに最大限度の衛生材料患者被服具

他を運んだのであります

豫定通り工兵隊の舟は出発することになり

ました 山砲隊以外は何も積んでくれな

せん 一同腹が立つやう かつかりするや

らであります 取りつゝ島もありません

でした

かうした一生懸命の連絡も結局何も得ること

なく 自力で民舟を徴発し 本隊に追及

するより外に途がないことになりました
 そうしてやつと集め得たのが小舟二隻で何
 程のこととも出来ません 然し今は寸時争
 小情況下でありましたので 出来れば多
 く諸材料を積むことにしました 積載を終
 ったのが四時過ぎで冬の日の午後は余りにも
 短かすぎます様でした
 一寸でも前進したいと考へて 小雨降る夕
 暮に愈々出立しました 案外水路は樂で
 金山衛城から約二里位のところで一泊しま
 した
 明く水は十三日 附近には種々の部隊が宿
 とみえて一面兵の波です
 砲兵部隊 輜重騎馬部隊 各部隊の大小行
 索等で道路といふ道路は 三列四列縦隊に
 なつて前進してゐます 然しその水も連日の
 雨で悪路にづく悪路で 砲兵部隊等輜重は
 その水こそ一寸ずりの有様でした

陸路に比べて水路は樂で 昨日の雨もやみ
 午前中に小さな町に入り 約二時間かか
 った途に あつた舟とおろし 物賃も集り
 ましたので此処から全員舟に乗りました
 町はづれで中食を済ませ 舟の集結を命じ
 て見れば はや八隻になつてゐます
 誰もいゝ氣持になつて居る歌聲があつて
 舟の舟さへありました
 舟のバ得あつた苦力も各舟に一人三人出来た
 ので 今までの苦力もすつかり忘れてしま
 つて 和かな水路 行程約六里 松蔭鎮
 の町に着きました
 X X X
 クリークの真上の 内地で言ふ料理屋らし
 い家に陣取つて 久し振りの鶏飯に腹
 一杯になりました 寝についても葉のがサ
 ゴツ言ふ音や 種々の面白い話など誰
 も眠らうとはしません

フリックの向でも 他師団管下の野戦病院
が開設して居て 人の話聲も洩れて来ます
午前二時頃だつたらうと思ひます
一人の兵が

敵襲

と一声大きく叫びました

折角ぬついておた皆も はや武装をすする有
様で 暗闇に大混雑でした それに丁度傍
氏堂を揺れおめた四五羽の鶏が 誰かに踏
まれにらしく「クワクワ」と鳴き出し
たので止め様と押へれば一層度々出す始末
で「気の短い者は

早よ殺せ

といふやうな醜態です

真の闇で何が何やらさつぱり見境もつきま
せん フリックの向側では銃声らしいもの
が起りました
不審番と呼んで聞いてみると 別に異常は

ありませぬ といふ報告です

それでは何かの間違かど調べてみますと
二時の交代で上番者は国生といふ一筆兵で
おい 国生 コクシヨ 起んか

と言つて起した言葉を ぬぼけた一人が敵
襲と聞き違へたのでした

それから小銃の音ときいたのも 焚き火の
音だつたのです

昨夜ぬる前誰かが 此の附近はず敵が残
つてゐて時々敵襲がある」と言つたのを
皆が聞いておたのも一つのあわてる種と反
つたのでした

すつかり寝入りはなに「テキンウ」ホンク
ときとは 早稲園さ水に位に思ひ あわて
るのも無理はありませぬが 様子判つて
一同大笑いでした

この騒動のおかげで 翌朝はすつかり寝過
して上起きた時は 何時たに太陽が高く

昇つて意持のよい朝でした

X X X

洗面してみると 前に来て顔をびよこんと
下げ

「兵隊さん お早う」

とはつきりした日本語で 支那人から挨拶
されました 不審に思つてよく訊くと

「大阪に十八年間居ました 事業前まで上
海の日本人の家に居ました 此度松蔭鎮
に避難して来ました 今日村に種油、
石油、醬油等がないので買出しに来ま

したが 日本の兵隊さんが一杯で致方が
ありません」

といふのです

「それでは俺が お前の必要な物を集めて
やるからそれを持つて行け お前は日本
語が達者だから 今日から日本軍の通譯
をつとめようんだ 家族の者に會つて安心

する様話して来たらどうか

とど言いますし、早く早速賛成しました

そこで苦力四五名に種々の品物を持たせて
兵ニミ名を監視につけてやりましたら一
時間ばかりしては、兵さんで戻つて来ました
そして言ふことには

「家族も安心しました 長男が二十七歳に

なつておますが長男も日本語が上手に話
せます 皆の者に、日本軍が来たからも
う安心して居る」と言つて来ました

といかにも落ちついたものです

「年齢は五十歳位でした、が達者な男で、南赤坂
裏 安慶上陸から漢口攻取まで 一年多月
の間日本軍の爲忠実につとめ、大きな功績
を残して行きました

自隊の通譯ばかりでなく、他部隊からも頼
まれて行つた事も度々でした

そんなことなどありまして、松蔭鎮の朝は

予豈より二時間も遊水て出登しよした
安んじて松江 青浦 崑山と複雑多難なク
リークの水路行軍をついけて行けたのは
通譯沈相鈞(シンハツケン)と船類の水路に明
い者が居るからでした

ホクセチと大尉殿

第三野戦

輜重兵上等兵 徳田公

堤！堤！

大ス係大尉殿の声です

麦粉の塗りついた手を気にしながら 急設
の陽覆から顔を出すと 大尉殿も体どりのり
出して 何時もの微笑を浮かべて

「ほいホクセチは出来んか」

「すぐ出来ます」

早く食べさせてく水
ハイ もう十分程待つて下さい
ウン かあ 頼むぞ
と云つて 引込まれたので 自分は大きく
で又はじめました

杭州湾上陸後間もなくの事でありす

輜重隊は前進不可能なので 自分は衛生兵
の一部と徴発小舟に乗り衛生材料運搬の任
務と與へられ下准尉殿の指揮下に前進して
まいりました

クリルクからクリルクを通じて行く 本隊
は逆道と山越として一線部隊と行動を共に
してゐる関係で 自分達は目的地を指示さ
る 地圖を頼りながら行動で逆道も進捗せず
その上僅か三十分程の小人教で 火器と言
へば小銃と相する者数人といふ有様でした
所々に敵死体も浮現し 中にはまだ呼吸止
らず 水を求めてウリルク畔に倒れ崩つて

おる者、或は難を逃れ、本隊にかくれておる者等と目をする度に、不安な花きつゝ前進してゐました。

こんな時、下瀬射撃はよく皆で言はれました。我々は何百の敵と会ふも何等畏るゝところはない。一身は死で以て果さるゝとも任務は死でも果すことは出来ないとこの数隻に積まれた衛生材料を無事本隊の前送輸送せねばならぬ。一方から舟は、この衛生材料は僅々二十名程の我々の生命よりも尊いものである。故にどこまでもこのを輸送し本隊に引渡す任務を果さねばならぬ」と。

十一月とけ言へ、晝間は尚太陽は酷烈に照りつけます。蘇州河の支流を夜々々晝々はく進む私達は、奇蹟的にも敵と会ふことなく目的地へ、と進行します。一隻に兵二名づゝ、分隊は甚かき船を二隻を併

と潜ませました。

「大人、々々、頂好々々」

「うん、進上さ」

「オー、オー」

私がせつせと遣うボクをケきみて、倉然と

そられ、おれが力の収、盛に空想を言ふ

一日二十時間近くも休みなしに働くり、大分腹もすくらしい

味見にボクモチを一つ頬張つてみると大分

甘い。自分下ら自信タツアリです

「大久保大尉殿、お来まし」

と大声で呼び、飯盒に入れて差し出すと隣

りの舟では大尉殿が生啗さうむやうに口を

ハシヤ、くさして

「オー、オー、
你、舟郎辺」

と支那語交りて急ぎ立て舟を私の舟につり

られる。大尉殿はニコニコして子供のやう

に、さも大車さうに身にして引込まれる。

手を洗ふためクリークに突込めば 珠の外
バ地よくヒンヤリとする、太陽はまだ内地
の九月頃の暑さみだいなのに 水の冷さは
さすがに大陸だな と感ぜられる

間もなく大休止 中食時苦乃にもやると
テンホくゝを連発 貪るやうに食つてゐる
堤 うまかつたよ 実際お前の腕も大分
上つたぞ

大尉殿の笑声― 賞められてゐるのか何だ
か― 若く笑はずには居られません

午後 大尉殿の舟に乗り移つてみると

オ― 来い― 今度は俺んところまで一杯
行かうか 陣中五勺の酒を互に喫し羨気
を養ふか

齢に似ずユーモラスな大尉殿です

鶏どもつボすか 吉舟 刺身をつくつく

堤も手癖いよせう

徴察した鶏が各舟に教頭ゴウのせてありま
す 船で料理する風景も陣中一景といふと
ころです

大尉殿は飲めない口ではあるが 酒座は好
きな人です 若い時は斗酒尚辞せず 大分
いけたらしい ところが三十五才かの折
夫人の遺言に「酒は止めずとも量を減らし二
人の娘を立派に育て下さい」とのことど
その後一日一合を止まず十五年間も続け
てゐられるとかで 又出征の折は 適齡期
の二人の娘さんが更に御忠告されたので
大酒は止めたと承りました
娘も御自慢の一つです

堤 お前は陣中で何が一番愉しみか
大尉殿はニミ杯で大分辯が流暢になられた
私が黙つてゐると

俺はネ 食ふ事が一番愉しみだよ
實際考へてみるとその通りです

加給口に背う衣華美一本と、一度に食べるのが惜しく少しづつ、何回にも食べる子供に還つてゐるのです

大尉殿のボクモケ好も、今日始まつたことではなく北支からの事です

大尉殿、ボクモケは内地でも食べられませんでしたか

と私が一寸皮肉めいた事を言つたところが

いや、そんなに好きになつたのは戦地に來てからだ、これもお前のお蔭だよ

変なところで埒に責任を持ちますね、いや、俺は感謝するよ、刺身が、

こそうだ、鶏の刺身食ふ所はそんなにならぬ、

いや、恐らく君の鹿角筈だけだろう、さう言へば鶏の刺身も大尉殿は、以前は恐

しがつて呆れてみて居られたが今では、私より好かもしれない、まあ今後陣中いかもの食いが始まるよ

こんなに言つて笑はれた大尉殿は、その後、聞もなく病気で帰還されましたが、それは殆んど二日とあらず、ボクモケを請求されたのには閉口しました

苦心の給水班

第四野戦

衛生少尉東條未彦

杭州湾上陸時私達の有する沔水車トラックは行かないとのこと、これは上海から上陸追及することになり、他隊へ交付予定の輜重車沔水機の残り一台は、下士官兵六名を附し、水牛を獲て曳かせ歩兵砲隊へ歩三三に跟随して先行せしめ、四名は沿岸で上陸部隊の給水に當らせ自分以下七名は師団戦斗司令部及戦斗部隊の防護要員として

必要の防疫用薬物及器具を携行して 降雨
泥濘の田の畦道を辿り 三日目に金山に着
いて乾いた道に出ました

夜は空屋で火を焚いて被服を乾かし暖を取
つたが 携帯の糧はなくなり南京米の粥に
塩なしの食を攝つて餓を凌ぎ乍ら漸く白鶴
港鎮で戦斗部隊に追及しました 夕暮にな
つて雨となり 溜水乍ら安亭鎮に入り汚い
民衆に入つてそのまゝぬすした

翌日部下五名を兼任班長の命を以て 防疫
及傷者處置手付として軍医部に残し 私
班長に従ひ 上海軍司令部へと下ける送達
書類其他物品を、上海から来る輝樂軍部隊
の帰り便に依託するため 白鶴港鎮方面に
行く途中敵の敗残將校らしい奴が 雨外傘
を着たまゝ、然々煙草を喫し乍ら 平然とし
て前方を横切りのを発見しました
直ちに呼止め調べやうとしたり怪しいので

後から来た友軍の歩兵(將校以下十名ほど)に引渡
したば 身体検査をしやうとしたら 振り
切つて逃げ出したので うしろから皆で一
斉射撃して殛しました

尚途中面白かつたのは安亭鎮のクリークに
磯泊してゐた民船十数隻に 上氏の家族全
部が集つて居たが 吾々をみて老幼男女何
れも双手を挙げ、或は手を合したりして無
抵抗助命を乞ふが如き態度を示してゐた事
であります

それから白鶴港鎮に出ましたが 輝樂軍部
が来るいのでそのまゝ書類を預つて 私
が 今所前方の橋梁に待つことにし 遂に夜に
入つて来たした
早速同隊の軍医殿に書類を托し安亭鎮に行
かうとしたら同軍部隊から(前)に出るから
その便で来いといふわうせで 部下六名
と器材を途中で便乗させ林樹梅の欽道沿線

まで来て、該軍糧隊と共に倉庫をこぼす
すと、日の丸のマークをうけた新式飛行機が
飛来して宙返りを数回やつて前方に飛去り
更に迂回して我等の上空に来て宙返りをや
るので、皆友軍慰安のため曲藝をやるのだ
位に思つて見ておたら、今度は低い高度の
斜降下で我等に顔上から機関銃弾を浴せて
雲を霞と逃げ去りました
その爲に弾薬車糧隊の兵ニ名が重傷を負い
直ちに軍医の手當を受けましたが、正しく
該飛行機は敵機で、友軍とごまかしたも
で、其の節銃道沿線に休んでおた歩兵一小
隊ばかりの戦斗員も敵機と知らず、一発も
射たなかつたのは実に残念でした。しかし
弾薬に命中しなかつたのが不幸中の幸であ
りました
その日、林樹標で湯茶補給防疫給水作業を
やつて夜になりましたが、空屋にも入水す

外に敵機を数回露骨に撃ちました
その夜は、敵機が飛来して外の者は眠れな
かつたのですが、私は前夜の疲れでグワ
くり寝入つて覺へませんでした
翌朝崑山攻囲で林樹標を出ましたが、途中
前夜歩十三の十三中隊が暗黒の路上を前進
する際哨を有する敵伏兵の挟撃に遭い、多
数の戦死傷を出し、背囊を負つたまま、路傍
に倒れた十六七名の戦死体をみて、合掌膜福
を祈りました
此の時ばかりはかうくと敵機に燃へま
した
その夕崑山の駅にぬらう、歩兵砲隊に付い
た先登の班員六名と糧重車、水枝、反巻材が
後方クリルクに舟で着いたといふので、急
ぎ引返し協力して、水を水牛に曳かせ、敵
弾を潜つて運んで来た。夜に入つて暗くな
り、駅に居た戦斗司令前は入城のため出発

したといふので、崑山入城に便なる直線路を進入しやうとしたが、敵弾激しく入城部隊は皆迂回入城することと、その後を追つて漸く迎り着いたのが十一時頃でありました。

翌早朝から城内井水の消毒並に浄水作業を開始しました。丁度此の時、合地附近にゴシラが発生してゐるとの事で大いに緊張して作業しました。

それから兵隊が如何に當時肉に飢へてゐたかと思はせるのは、自分達が浄水輸重車の曳行及器材駄駄用としての水牛三頭を屋外藁原に繋いでおきました。一つの間に他部隊の兵によりて三頭共処分料理されておきました。これには實際呆れてしまいました。翌日米発といふので班員全部を分けて探し尋うじて一頭は補充が出来ました。

翌十一月十七日、合地を出発、梯岡に跟随

行軍をしましたが、降雨、爲、道が泥化し、水に山さし割石の混つた道で、長途のことで水牛は足蹠を擦傷出血して歩行せず、班員で押して行かねばならぬ状態となり、途中亦探しましたが、他部隊も求めておますので仲々居らず、大変苦勞をいたしました。兎角初めから浄水自動車及トラクターで行くべき隊が広急装備で歩いて行くのですから、止むを得なかつたのです。

何故斯様に無理して行つたかは、主力部隊の防護給水をせしめてほしいといふ念願で行つたのであります。

又戦馬具其の他人員の貰へなかつたのは、各々の班は軍道部隊で軍への連絡が急場の事とて間に合はず、師団も亦その余裕がなかつたのであります。